

河川整備基金助成事業

雁木保存とシジミ漁による
水辺文化の継承プロジェクト
報告書

平成19年度

特定非営利活動法人 雁木組

1. 事業目的

かつて広島は、舟運の盛んな水の都として栄えた。その名残である歴史的な護岸や雁木が市内中心部に今なお残っている。雁木組では歴史性の調査を行い、これをきっかけに選奨土木遺産（土木学会）の認定を受け、市民の財産としての雁木が認知されつつある。今後も、こうした雁木を「使いながら残す」ことは、河川文化を育む上で大切なことであると考えている。また、広島川ではしじみ漁が行われている。これら、暮らしと結びつきの深い水辺の資源を掘り起こす作業を上流域・地域住民と一緒にを行うことによって、川への愛着や誇りをはぐくみ、水の都の文化の継承を図ることを目的とする。

2. 事業概要

以下の3つの事業を実施した。

- (1) 地域による歴史的な雁木の保存と継承
- (2) 漁業者による子どもたちへの食文化継承
- (3) 水辺文化を伝えるインタープリターの育成とガイド船の運航

3. 個別事業報告

(1) 地域による歴史的な雁木の保存と継承

10月28日、太田川上流域の「石垣塾」を訪問。

- ・石垣塾では、伝統的な石積をする最後の職人といわれる上本宏實氏の技術を伝承すべく、広島城の5分の1の石垣を築く講座を開催。上本さんと7名のお弟子さんが、下流域の雁木修復の協力を快諾して下さった。

フィールドワーク

- ・11月4日、上本氏と石垣塾メンバー、雁木組メンバーおよび一般参加者によるフィールドワークを実施。修復の候補地として、本川橋橋詰、元安川雁木、京橋川雁木群の3ヶ所を視察するとともに、石の積み方、加工の違いによる護岸の年代測定の方法を教わった。



(左上) 上本宏實さんによる視察。

(右上) 元安川の「まる雁木」。高潮事業の計画地であることから、今回の修復候補地からはずす。

(左下) 京橋川の雁木群。切込み剥ぎの護岸は明治中期から大正期の整備。石加工の専門家、石丸勝三氏のご意見も伺った。

文献調査・ヒアリング

・戦前の様子を知る地域の方々へのヒアリングを実施。80代、90代の方から貴重なお話を伺うことができた。また、市文化財団をはじめ、貴重な写真資料等の提供を受けた。



中村さんと川本さん。本川小学校出身。



広島見番さん。女性と川の関わりを話して下さいました。



大正6年生まれの今西さん。家の前の雁木は、御祖父が個人で造られたとか。建造年代判定の根拠となりました。



地元テレビ局でも番組が制作されました。

雁木の解説メモ・・・三浦先生、上本さん（石工）、石丸さん所見。

戦前の記憶ヒアリング調査

戦前の文献資料、写真資料

より、氏原まとめ（一部、川后、山崎）。

<全体>

- ・ 広島市内には新旧含めて約400ヶ所の雁木がある
- ・ 国直轄の河川は主に昭和30～40年代に整備が行われ、戦前の護岸や雁木は楠木大雁木（一部積み直し）、天満川（未調査）に残るのみ。
- ・ 京橋川右岸には戦前からの雁木が群として残っている。
- ・ こうへい橋から柳橋までは、選奨土木遺産（社：土木学会）の認定を受けた。

<全体～歴史>

享保13年（1728年）の古地図「広島町新開絵図」は雁木の位置と数が正確に記されているといわれる。文化5年（1808年）に本川兩岸を描いた「江山一覽図」にも、雁木が描かれている。これらの資料から読みとれる雁木の特徴は以下の通り

- ・ 雁木は町人町（ちょうにんまち）に多くみられる。建物は水辺の護岸上に建てられており、ここでの雁木には裏木戸が多く見られる。
- ・ 武家町では、屋敷が塀で囲まれていて、護岸の端から距離があったことから、護岸に木戸は存在しない（必要ない）・絵図には、「渡し舟」の船着場としての雁木のほか、女性がたらいを持つ姿、

<場所ごと>

本川橋西詰

- ・ 常夜灯の土台の石積みは江戸時代の建立。周囲の護岸や雁木は、位置は戦前と同じであるが、手前（川

側)に新しく積み直したものである(昭和30年~40年代)

- ・舟つなぎ石の背後にある護岸は、16世紀の毛利時代の護岸といわれている。京橋川に残る個人建造の雁木に比べ、粗雑な積み方をしている。(江戸の公共工事の質がうかがえる)
- ・平成20年3月、雁木組と加計の石工さんとで歴史的な護岸を修復する「シビクトラスト」を実施。川底から舟つなぎ石を発掘し修復した。
- ・橋脚は「江戸切り」加工の石積。明治30年の創建当初のもの。(漆喰目地であることから昭和戦前と判断される。)
「江戸切り」は石材の露出した面のみを、周囲をわずかに残して自然岩調に加工し、中央部を盛り上げた石材を用いて積む手法で、重厚感のある仕上がりとなる。

本川小学校あたり

- ・大潮の満潮ラインぎりぎりの高さに、小段があった。水辺に住居があった人たちにとっては「生活道路」である。この生活道路から数軒が共有する雁木をあがり、各家々に入っていた。(昭和初期の話) この生活道路を「雁木」と呼ぶ人も。

寺町界限>

- ・戦前は、佛護寺の絵葉書にみられるような護岸が続いていたと考えられる。
- ・江山一覽図に、水制工の絵がかかっている。ほぼ同じ場所に、50年代につくられたデ水制工がある。こうした水制工のことを「丸雁木」と呼ぶ人も。

楠木界限

- ・江山一覽図では、楠木の少し下流には武家の別邸があり、屋敷にむかってあがる長い雁木が描かれている
- ・江山一覽図では、斜面状(階段になっていない)の荷降ろし場で木材の積み下ろし風景が描かれている。
- ・江山一覽図に、このあたりで「渡し守」と記した場があり、渡し舟の乗り降り場として描かれている。

<京橋川、こうへい橋>

- ・京橋川右岸、こうへい橋近くの護岸は昭和初期。こうへいさんが築造したもの。
昔の写真あり。

<京橋川・縮景園>

- ・薬草園あたりは、部分的に江戸時代の石の積み直しと思われる。その上流側は不ぞろいで明治中期と思われる。
- ・取水口の下は矢筈積みだから大正の頃だろう。
- ・“逆逢坂”の雁木 明治後期

<京橋川 栄橋界限界>

- ・縮景園下流から京橋にかけて、右岸側は竹やぶと石がごろごろしているような場であった(資料・ヒアリングから)
- ・明治39年の栄橋架橋をきっかけに、京橋方面にむかって宅地化が進んだと思われる
- ・栄橋~京橋の間は、個人が築いた護岸である。管理も各家が行った。今でもパッチワーク状に積み方が異なり、屋敷の大きさをうかがい知ることができる。

<上柳橋下、1つ目の雁木>

- ・今西さん(橋から2つめのマンションオーナー)は大正6年生まれ。その祖父または曾祖父が護岸と雁木を築いたという(明治中期頃か?)。家は今春流(こんばる)の師範で、川沿いの離れは能舞台として使うこともあった。みょうじん祭りでは、舟屋さんと呼ばれ、お弟子さんや芸者さんを招待して舟で見物をすることもあった。
- ・今西さんの子どもの頃の夏休みの仕事は、この護岸と雁木をモルタルで補修することだった。
- ・階段をあがりきったところに裏木戸があった。

<RCC 上流の雁木・・・裏木戸跡つき>

- ・切込接。目地にモルタルが築造当初から入っているが、立派なものであるためと考えられる。ひとつ下流の雁木を築造した石工職人とは異なる。側溝がなく、削出の戸当たりがある。
- ・裏木戸は開けっ放しのことが多く、あがりきったところに裏木戸があった。

- ・ この雁木の家は大変なお金持ちで、雁木にはボートがぶらさがっていた。

< RCC 上流の雁木・・・裏木戸跡なし >

- ・ KR 2 3 は明治末から大正にかけてのもの。切込接。
- ・ 片側に側溝があることから、屋外用。
- ・ 雁木と石積みの下部に焼けた跡がある。石積みの外角の下部の一部のみに典型的な熱による割れが見られる。おそらく原爆の時に建物の一部が雁木に倒れ込んで焼けたためではないか。石積みの外角が一部のみ焼けているのは、その時の潮位が焼けている部分の下ぐらいで、その後潮が満ちて火が消えたためではないか。原爆後一部積み替えたと思われるがそれはおそらく加計町の石工だったろう。この技術は加計の石工しか継承していなかった。

K R 2 3 から下流護岸は明治末から大正のもの。その上流 K R 2 2 の少し上までは大正のもの
雁木の年代判定

- ・ 雁木自体では年代の推定ができないので、周囲の石垣部分で判断を行う。
- ・ 広島石垣の石材はほとんどが花崗岩である。
- ・ 石の表面にノミによってはつた「ノミ切り」があるものは、昭和 10 年以前のもの。
- ・ 練積よりも空積の方が、コンクリートが縮まないで狂いが無い。

0 平積み 江戸

1 単なる落とし積み = 石が不ぞろいで、ほぼ台形、空目地で矢筈になっていない 明治中期

2 落とし積みだが、矢筈っぽくなっている 明治後期から大正

3 矢筈空積み 大正

4 モルタル目地の矢筈積み 大正後期から昭和戦前

5 間知石の矢筈積みモルタル目地、石が無加工 戦後

花崗岩と熱

- ・ 花崗岩は熱に弱いので、1 ~ 2 時間火にさらされると表面がもろくなり割れてしまう。その際、花崗岩は鉄分を含むため、熱を受けると鉄分が酸化して赤茶色に変化する。形状としては、石の表面が剥離し、徐々に角が取れて丸くなる傾向にある。
- ・ 逆に熱線が当たっても表面的には変化が分からない。原爆による熱線でも同様。しかしながら、広島において石垣が焼けるような火災は起こっていないことから、原爆による火災で熱を受けたことが考えられる。よって、広島において石垣に焼けた痕跡が見られたら、その痕跡は原爆によるものであり、焼けた痕跡の見られる石垣は 1945 年には存在していたと解釈することができる。
- ・ 水面際の石は、厳冬期に隙間に入り込んだ水が凍って膨張することによって割れることがある。広島において、川岸の古い石垣は、原爆の熱戦と、原爆による火災から脆くなっており、石が顕著に欠けている傾向がある。

石の切り出し方

1 楔を打ち込んで出来る矢穴の大きさは江戸時代は 15 cm くらい、白島の矢穴は 6 cm くらいと小さいことから、それよりも新しいと考えられる。

2 矢穴にくさびを打ち込んで石の目に沿って割る。

3 ダイナマイトが発見されたあと（ダイナマイトは明治後期から）は、石にあけた筒状の穴にダイナマイトを差し込んで爆発（発破）させて割る。石にあけた穴が残ることがある。したがって、石の脈絡の無いところに丸い穴があるのはダイナマイト発見後の物。

4 但し、白島で見たものは規則正しく階段に沿ってあいていたので手すり穴の跡と思われる。

石垣の隅部に反りを付けるのは、戦前の仕事

石垣の角度

：急 商家などの防犯・防災のためか？ ex) 下流

：緩やか もともと土手であった部分を、後に石垣をその表面に築造したものか？

ex) 縮景園の辺り

2月 護岸修復に使用する栗石を集める作業を実施。
河床から、壊れた舟つなぎ石を発見した。

<舟つなぎ石修復までのプロセス>



2月23日 川底から「舟つなぎ石」の上部を発掘..断面径は22cm 高さ40cm.



上部の欠けた舟つなぎ石. まわりのコンクリートを削る作業。



コンクリートを取り除いてみると埋まっている部分は60cm 以上も.



コア芯を通す作業



2月 測量ワークショップ

・文化財建造物と同様の調査を行うこととし、現況図面を作成。



2008年2月16日雁木組に測量チーム結成



現況の記録. 石積みを正確に図面

3月1・2日、15・16日の4日間、修復作業を実施

4日間で、のべ74名が参加。

作業中には、地域の皆さんが見学に来て、舟つなぎ石や子ども時代の話をしていきました。



3月1日 石の積み直し作業



3月15日 作業中は多くの地域の方が訪れました。昭和30年代、ここにあった舟つなぎ石を記憶されているという方も

山県石工の伝統を継承する上本宏実さん。先人の積み方を忠実に再現することに苦慮されていました



広島城と歴史ガイドボランティアの皆さんが、修復作業の見学。

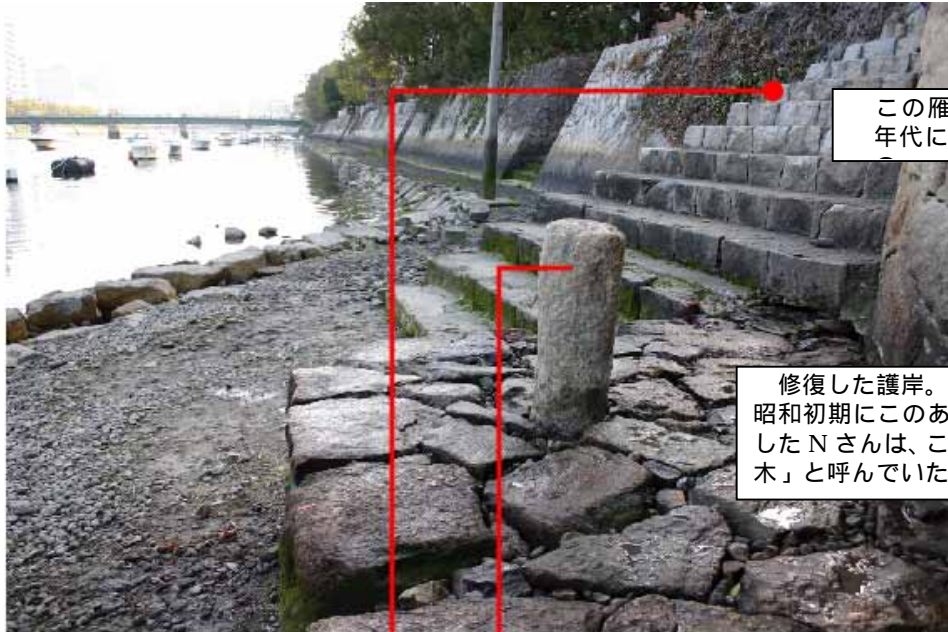


修復後の記録図面を作成。

シビックトラスト～本川橋詰の歴史的な護岸の修復～

修復した「舟つなぎ石」

- *「舟つなぎ石」の呼称について
文献調査中ですが、地域へのヒアリングで多く聴かれたことから、とりあえず「舟つなぎ石」と呼んでいます。「もやい塚」や「もやい石」などの呼び方もあるそうです。

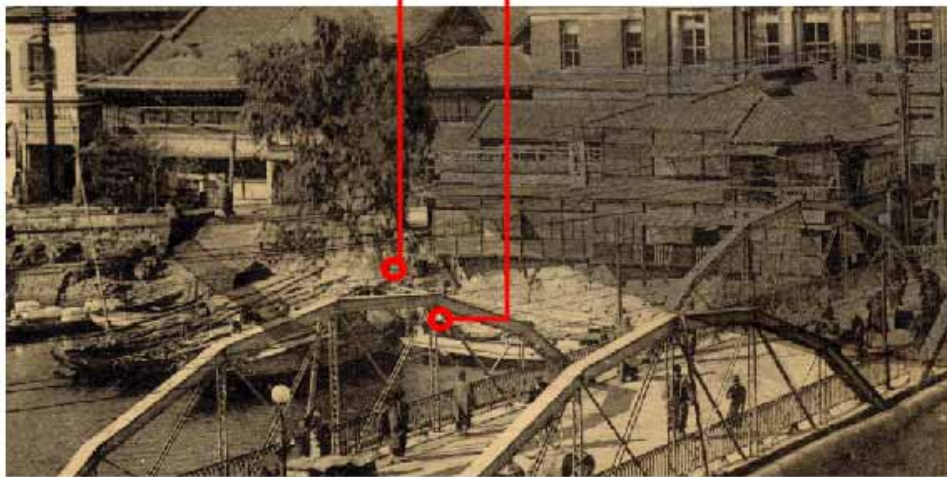


この雁木は昭和 30～40
年代に造りなおされたも

修復した護岸。
昭和初期にこのあたりで少年時代を過
した N さんは、これを「生活道路」=「雁
木」と呼んでいたそうです。

(現在の雁木は昭和30～40年代のもの)

舟つなぎ石の位置
雁木の位置



大正時代初期～昭和初期の絵葉書（一部）
舟つなぎ石のあるところには、たくさんの舟が。

大正時代初期～昭和初期の絵葉書（一部）
本田美和子さん提供

(2) 漁業者による子どもたちへの食文化継承

- 10月 白島小学校の5年生の授業で、雁木としじみの栽培漁業について説明。



- 、広島市内水面漁業協同組合との共催により、約1. tのしじみの稚貝を放流した。
(旧太田川、天満川)
- 5月24日、白島小学校区の子どもたちを中心に参加市民を一般募集し、専門家からしじみの栽培漁業について学び、漁師さんと一緒に稚貝を放流した(約100kg)。
主催：NPO 法人雁木組 広島市内水面漁業協同組合
場所：白島の水辺 参加者 60名 スタッフ 12名
- 今回、稚貝を放流した場所で漁をする4名の漁師さんと、しじみを取り扱うスーパーの協力により、しじみおにぎり、しじみ汁の実演と食事会を行った。



広島市内水面漁業協同組合の安達組合長からしじみのお話をききました。「しじみは砂の色を反映して黄金色をしています。これから播くしじみの赤ちゃんは漁師が育てて採ります。」



しじみの赤ちゃんと、7年のしじみを比較。広島の川でとれるしじみは、とても大きい理由がわかりました。



4艇の舟に乗り込んで、しじみの稚貝を放流しました。





しじみおにぎりと、しじみ汁。



漁協さんと食事会。

(3) 水辺文化を伝えるインタープリターの育成とガイド便の運航

- ・ 10月～5月、専門家に依頼して、水辺に関わる様々な情報を集めた。
- ・ 雁木タクシー船長のほか、「ひろしま通」認定者が、インタープリターをめざして参加した。
- ・ 5月以降、ガイド便として「鳥観察」「水辺の歴史」などの便を就航している。



水辺の生き物



鳥の専門家から、水辺の鳥の生態を教えていただく



シティガイド「ひととき」さんの指導



ギリシャのシビルさんも広島川の案内。

助成番号	助成事業名	所属・助成事業者名
19-3111-063	雁木保存とシジミ漁による水辺文化の継承プロジェクト	特定非営利活動法人雁木組
助成事業の要旨	<p>〔目的〕 広島川の川にはかつての船着場である「雁木」やしじみ漁など、暮らしと結びつきの深い資源が多く残っている。これらの資源に光をあて、地域住民と一緒に歴史性の調査・保存活動や暮らしの中での活用を推進することにより、川への愛着・誇りを育むとともに、水の都の文化の継承を図ることを目的とする。</p> <p>〔内容〕</p> <p>1) シビクトラスト（歴史的護岸と舟つなぎ石の修復） 江戸時代から残るといわれながら崩れたままになっている歴史的な護岸について、伝統的な石積技術を継承する上流域の石工さんと地域住民とで修復するシビクトラストを実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 11月：修復場所決定のフィールドワーク（13名参加） ・ 2月：栗石広い、舟つなぎ石探しの作業（10名参加） ・ 1～3月：史実調査・ヒアリング調査（のべ24名） ・ 2月：測量ワークショップ（8名参加） ・ 3月：修復作業（のべ74名参加） ・ 3月：見学会（25名参加） <p>2) 漁業者による子どもたちへの食文化継承 京橋川でしじみ漁をする漁業者の方と、しじみを扱う地元スーパーと、地元の小学校の参加により、しじみの栽培漁業理解と「食べ方」のPRを実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 10月：白島小学校の野外学習で雁木としじみの説明（5年生約20名参加） ・ 5月：稚貝放流と食の教室、勉強会実施（60名参加） <p>3) 水辺文化を伝えるインタープリターの育成とガイド便の運航</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 鳥、歴史、ガイドの専門家と船上学習会を開催。「ひろしま通」認定者とともに船上ガイドを実施した。（学習会4回、ガイド便は毎月運航中） <p>〔結果〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 壊れていく歴史的護岸を修復する作業を通じて、地域の年配者がかつての水辺の様子を語ってくれて、記録に残すことができた。また修復作業中に偶然に舟つなぎ石を発見したことにより地元や郷土史愛好家の関心が高まった。助成事業終了後も雁木めぐりや舟つなぎ石を学習する講座が、市主催で開催されるようになっている。 ・ インタープリターにより、歴史的護岸の船上見学会も開催され、舟運ネットワークによる新しい観光スタイル構築されつつある。 ・ 地元小学校による「しじみ」への関心が高まり、夏以降の実施依頼がある。 	

助成番号	助成事業名	所属・助成事業者氏名
19-3111-063	雁木保存とシジミ漁による水辺文化の継承プロジェクト	特定非営利活動法人雁木組
助成事業実施成果の自己評価	<p>〔事業・活動計画の妥当性〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 原爆投下により壊滅的な被害を受けた広島において、戦前の水辺の記憶を残し、後世に伝えていくことは大きなことである。今回の事業を通じて80・90歳代の市民の皆さんの記憶を記録に残すことができたことは大きな成果であり、事業テーマとしてよかった。 ・ また、失われつつある伝統的な石積技術を継承することの大切さを感じる事業となった。今後もこうした機会をつくり、広島石積み技術の継承につながればと思う。 <p>〔当初目標の達成度〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ シビックトラストは、上流域の石垣塾、広島市文化財団との連携を図ることができた。特に修復にあたってのヒアリング・文献調査には多くの人たちと関わりをもつことができ、おかげで歴史上の新たな情報を得ることもでき、大きな成果であった。 ・ 一方、作業が本格的で、工数は予定の2倍以上もかかった。加計の石工さんとそのお弟子さんたちの好意により急遽、2週間後にも修復イベントを実施することになったが、予算の面でも無理をすることになってしまった。今後も、崩れた護岸を修復したいというニーズがある。河川管理者の理解が課題となる。 ・ いずれの事業も予想以上の参加者であった。しじみの稚貝放流は定員の2倍の応募があり、断る事態になってしまった。今後は参加費の工夫などにより、継続することが課題。 <p>〔事業・活動の効果〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ シビックトラストを実施したことで、本川橋詰の護岸の歴史性があきらかになった。河川管理者もこれまで応急処置にとどめながらも歴史性を尊重して現状を維持してきたことを互いに確認することができた。歴史的な護岸を残す手法を構築することができたといえる。 ・ 舟つなぎ石の護岸として、すでに見学会や学習会が開催されているが、舟運を物語る場として、雁木タクシーで活用し、広くPRをしていきたい。 ・ 放流したしじみの追跡として、白島小学校の学習に取り込んでいただく予定。 ・ シビックトラストをテーマにNHK、民法の番組がつくられ、PRになった。 <p>〔河川管理者等との連携状況〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回のシビックトラストは、国管理の河川で実施した。互いの情報提供により、以前の河川整備（歴史的護岸の保存）に意義を付加することができた。 ・ 河川管理者との連携により、活動の幅が広がった。 	